Osaka University
Forum on China

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2011-10

進化するロック専門誌『通俗歌曲』

――中国にロックを紹介した刊行物――

青野 繁治

大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー No.2011-10

進化するロック専門誌『通俗歌曲』

――中国にロックを紹介した刊行物――

2011 年 9 月 10 日

青 野 繁 治 †

† 大阪大学大学院言語文化研究科教授
562-8558 箕面市粟生間谷東 8-1-1 大阪大学箕面キャンパス
s_aono@lang.osaka-u.ac.jp

はじめに

中国にロック音楽を紹介するのに、香港・台湾ポップスおよびその業界が大きな影響をもったことはよく知られているが、日本のミュージシャン（さだまさし、アリス、ゴダイゴ）が直接にライブ活動を行なうことによって、重要な役割を果たしたこともまたよく知られた事実であり、花蓮会議においては、このあたりの事情を述べた[青野 2009]。80 年代の改革開放政策によって、中国への留学生を通じて、カセットテープや楽譜や楽器が中国にもたらされた事情についてもすでに文章を書いたことがあるが[青野 2006]、それはいわば直接的な音楽活動による交流であった。

それらは強烈なインパクトを中国の若い世代に与え、崔健を代表とする後のロックシーンのリーダーたちを育てて行ったのであるが、こうして成長していった中国のロック音楽を大衆的なレベルで認知させたのは、政府機関によってコントロールされるテレビなどのマスメディアではなく、ライブステージを提供するバーやライブハウスのような、ミュージシャンやファンたちによって次第に作られていったコミュニティの場とそれを 90 年代後半以降、広い仮想空間で展開するのを可能にしたインターネットであった。

後者の果たした役割については別に論を立てなければならないが、それを除けば、前者のようなコミュニティで情報を伝達する手段として機能していたのは、DJ 有待が 90 年代に西洋のロックを紹介することを目的として行なっていたラジオの音楽番組といくつかの民間雑誌だったと思われる。DJ 有待については、すでに『大陸ロック漂流記』に紹介があり、90 年代当時の中国の若者に大きな影響力をもっていたことが紹介されている[ファンキー末吉 1998]。ただ、実際に音源が残っているわけでもなく、どのような内容で、どれくらいのバンドや曲が紹介されたのか、その全体像は今ひとつ明らかではない。

それに対して、印刷物として発行されたものは、それが目に入る形で残されている限り、中国にロックがどのように紹介されたかを知る上で重要な資料となる。

そのほかに、いわゆる「打口帯」（ダーコーダイ＝穴をあけた廃棄用のカセット）のように、西洋ロックのレコードやカセットテープ、CD がどのように中国に輸入されたかを調べることができれば、それも重要な資料となるだろう。またミュージシャンや音楽家の回想録、テレビ番組のインタビューなども重要な情報となる。ロックについて言えば、2004 年に CCTV 中国中央電視台が放映した番組「記憶」の一シリーズ「中国音楽的 N 個時間」は、作家でありシンガーソングライターでもある劉索拉を中心に、80 年代の中央音楽学院がロックや電子音楽にも強い関心を示したことを語る重要な映像資料である。書籍資料もすでに多く出版されている[雪季 1993、橋爪大三郎 1994、汪継芳 1999、于今 1999、顔峻 2001、2002、2004、陸凌涛・李洋 2003、朱大可・張閎 2005]。

今回は、それらすべてを調査する余裕はない。そこでいくつか限定的な雑誌メディアについて、若干の調査を行なった。音楽情報を中国の人々に伝える役割を果たしたと思われるメディアには、『中国電視報』『北京電視週刊』などのテレビ番組情報誌紙があり、また対象は中国人ではなく中国在住の日本人や外国人であるが、『Super City 北京』『TOCOTOCO』などフリーの日本語版中国情報誌、『that’s BEIJING』のような英語版中国情報誌があり、さらに中国人向けのロックないしポップスの専門誌としての『通俗歌曲』『摩登天空』『[V]magazine』『我愛揺滚楽』などがある。この中で比較的初歩的にではあるが調査できたのは、『通俗歌曲』『摩登天空』および『我愛揺滚

楽』の三誌である。本稿では『通俗歌曲』をとりあげ、その果たした役割を歴史的に考察する。

Ⅰ．進化するロック専門誌――『通俗歌曲』ヒストリー

『通俗歌曲』は、おそらく最も早くロックの情報を中国で紹介したメディアの一つである。

『通俗歌曲』は、日本の国会図書館に当たる中国国家図書館には所蔵されていない。私が所蔵を確認できたのは、北京首都図書館であった。最新の号は開架の雑誌のコーナーで閲覧できるが、バックナンバーは書庫にあるため、コンピュータで所蔵を確認し、号数を指定して、請求しなければならない。コンピュータ検索では、この雑誌も全巻は揃っておらず、90 年頃から合本にしたものが存在していた。そこで 90 年代のものを全て請求して、閲覧し、いくつか確認できたことがある。

90 年代に発行されていた月刊誌『通俗歌曲』は、小型判の冊子で、雑誌という体を成しているとは言いがたいものだった。それは日本で言えば、往年の『明星』などに付録としてついていた歌詞集、楽譜集のような体裁の小冊子だった。記事らしきものは少なく、誌面のほとんどを楽譜が占めており、しかもその楽譜は五線譜ではなく、また所謂日本のギター雑誌のような６線のタブ譜でもなく、中国の京劇の伴奏などを表記するのに用いられる「簡譜」と呼ばれる数字譜であった。

掲載されている曲目は、中国の民謡や歌謡曲が主体であったが、時代が下るに従って、香港・台湾のポップス、歌謡曲が増えて行き、中国のロックまた欧米のフォークソング、ロックの楽譜も掲載されるようになっていった。

1990 年代末になって、『通俗歌曲』は転機を迎えた。ロックの専門誌に変貌を遂げたのである。誌面もＢ５版の普通の雑誌並みの大きさに、写真などもちゃんとしたグラビア印刷になり、紙質も向上した。それ以来、表紙に「中国揺滚第一刊」というキャッチフレーズを掲げて現在に至っている。新生『通俗歌曲』がそれまでと大きく変わった点は、欧米や中国のロックバンドに関する情報、ロックフェスティバルやライブの情報が記事の中心となったことである。またバンドメンバーの写真も多く掲載され、ロック情報誌としての性格を強めたと言えよう。また人気バンドのヒット曲の歌詞が掲載されたり、ロックの名盤や新盤のディスコグラフィが掲載されることで、ロックに関心をもち、これからバンド活動を始めようと考えている若者には、よい参考書になったものと思われる。

ただ理由は明らかでないが、それまで主をなしていた楽譜は、姿を消し、アーティスト情報記事に場所を譲った。著作権等の問題もあるのだろうが、むしろ書店の音楽コーナーにならぶ楽譜の専門書にポップス、ロックが登場するようになって、そちらに役割を譲ったものと思われる。

『通俗歌曲』という誌名を維持したのは、まだ「揺滚」という言葉が公安の取り締まりの対象と成りうる事を慮ったのであろう。中国初のロック音楽の学校「迷笛現代音楽学校」が「現代音楽」という言葉を用いているのも、同じ理由であったということである。

1999 年以降の表紙を比べてみると、この雑誌の微妙な進化の過程を読み取ることができる。1999 年までは、表紙のタイトルは、ただ『通俗歌曲』と記されているだけであった。それでも 1999 年前後になれば、内容的にはロックに関する記事が大半を占めた。表紙を飾るアーティストの写真も全て、ロックのアーティストであった。タイトルに「揺滚」も「ROCK」も言葉としては使わ

れていない。11 月号に Def Leppard の特集が組まれ、「揺滾特刊」の文字が見えるのが唯一の例外である。おそらくこのころから「ロック」に対する公安の規制や警戒が緩んできたのではないか、と思われる。この「揺滾特刊」を機に、2000 年からサブタイトルとして、「中国揺滾第一刊」がつくようになり、またタイトルの「通俗歌曲」のうしろにさりげなく「ROCK」の文字がつくようになるのも、同じころである。こうして少しずつ雑誌は「ロック」色を前面に押し出し始める。

しかし、その方向性にも紆余曲折があったろうことは、2001 年から 2002 年にかけての表紙タイトルから見てとれる。たとえば 2001 年の 6 月号から 9 月号にかけて、タイトルには「通俗歌曲」「ROCK」「中国揺滾第一刊」のほかに、「揺滾版」の文字が加わり、10 月号では、「揺滾版」の代わりに大きく「ROCK」の文字が加わっているのに対し、11 月号では、「通俗歌曲」のタイトルが小さく右下に退き、「ROCK」「中国揺滾第一刊」が消えて、上部に「ROCK　POP」の文字が、あたかも雑誌のタイトルのようにふるまっている。12 月号では、それが 9 月号以前に戻るのだが、年が明けて 2002 年 1 月号は、「通俗歌曲」が画面上部に位置するものの、「ROCK」「中国揺滾第一刊」は消えており、「通俗歌曲」のタイトルよりも大きな「POP」の文字が自己主張している。2 月号からは、その「POP」が「ROCK」に変更され、後ろに「ROCK」のついていない「通俗歌曲」のタイトルの下に「中国揺滾第一刊」が復活し、このパターンが 2004 年ころまで継承される。

ここには、雑誌でどのような音楽を取り上げるか、をめぐって、あるいは「ロックとは何か」と言ったような、流行音楽の定義をめぐって、編集部に議論と対立があったであろうこと、結果としていわゆる「POPS」も包含する形で「ROCK」に一本化して行ったという流れが読み取れるのではないだろうか。

しかし、それは矛盾あるいは対立の止揚ではなかった。2004 年の途中から、「ROCK」が漢字化され、タイトルに昇格する。つまり誌名が『揺滾』となり、副題として、「通俗歌曲」「中国揺滾第一刊」がつくようになったのである。それはつまり「ロック」が市民権を得たことを広く宣言するものであったと考えられる。ただ商標登録の問題もあったろうし、雑誌としての継続性も担保しなければならなかったのであろう。「通俗歌曲」の名が、表紙から消えることはなかった。この誌名変更は読者に混乱を生じ、読者の混乱に合わせるように、また『通俗歌曲』のタイトルが大きくなる、というような一こまもあった。

更に「通俗歌曲」は半月刊となり、月に二回発行されるようになった。そのことは、需要と供給の原理から「ロック」の人気の高さを表していると考えられるが、それはまたロックファンの増加とともに、ロックファンの嗜好の多様化も意味していた。

つまり、「通俗歌曲」は、通常の「揺滾」バージョンを月一度刊行しつつ、二週間あけて、「非音楽」（Not Only Music）「吉他」（ギター）「貝司」（ベース）「鼓」（ドラムス）鍵盤（キーボード）というように、「ロックからはずれる」音楽や、ロックの楽器毎の特集が非定期的に企画され、「非音楽」などは次第に定期化していく、というような現象が生じた。

日本で『ヒットポップス』や『ニューミュージックマガジン』といった総合誌から、『ギターマガジン』『キーボードマガジン』などへと展開していったのと同じような現象であり、そこには、楽器を始めた若者たちの楽器演奏法に対する関心が楽器ごとに異なってきたことと、そういう楽器購入者予備軍に対して、エレキギター、シンセサイザーなどのメーカーや外国製楽器の輸入業者、音楽学校が存在して、雑誌出版のスポンサーとなっていた、という状況も指摘できるだろう。

着実にロック音楽が産業構造の一角に組み込まれていく姿がそこから見て取れる。

Ⅱ.『通俗歌曲』の果たした役割——1990 年代

さて、『通俗歌曲』は、どのようにロックを紹介して行ったのだろうか。

90 年代初期の『通俗歌曲』は、所謂歌謡曲を紹介するのが主であった。それも流行の歌謡曲であった。中国大陸でも中高生に人気の高い台湾の作家三毛は、中国西部の民謡作曲家王絡賓のファンで交流があったこともあって、1991 年 1 月に自殺したことが報じられると、同年 6 月の号で「三毛専欄」と言う特集が組まれ、彼女の作詞になる「我愛橄榄樹」「滚滚紅塵」「飛」の楽譜を掲載したのは、やはり話題性に影響されている雑誌の一側面を表している。

1992 年 5 月号にロックではないが、日本でも「イエローチルドレン」のタイトルで発売された朱哲琴（ダダワ）の「黄孩子」が“新専輯”（ニューアルバム）として紹介されている。「音楽茶座」という連載コラムの記事として取り上げられたのである。上海音楽学院の教授でもある作曲家何訓田・何訓友兄弟のプロデュースによるこのアルバムは出色の出来で、朱哲琴は「中国のエンヤ」とまで言われるが、これより後、朱哲琴の音楽は民族色それもチベット色を帯びてくる。チベット文化は王勇、鄭鈞など多くの中国のミュージシャンに大きなイマジネーションを提供したと思われるが、彼女もその一例である。ポップなヒットを狙うのではなく、芸術的表現を重んずる彼女のアルバムが紹介されていることは、このコラムの担当者の炯眼を示していると言ってよい。

1992 年 11 月号に、人気ロックバンド黒豹（ヘイバオ）の「無地自容」の楽譜が掲載されたのもタイムリーなことであったと思われる。丁度、黒豹のファーストアルバムが発売されたのち、音楽性の相違からヴォーカルの竇唯が脱退し、キーボードの峦樹がヴォーカルを兼ねるようになった時期で、同時期に発売された中国ロックのアンソロジー「揺滚北京」のカセット版には、峦樹のバージョンが収められて、ヒットしたのである。（言うまでもないが、ファーストアルバムに収められている「無地自容」の声はもちろん竇唯である。）

1993 年 4 月、その「音楽茶座」のコラムに「飛・従“唐朝”看中国揺滚」という記事が掲載された。前年の黒豹に続いて、中国の二大人気ロックバンドの登場である。黒豹は楽譜だけだったが、唐朝の場合は、実力派バンドの紹介記事を通じて、中国ロックの成長ぶりが謳歌されている。楽譜は台湾の魔岩文化レーベル（滚石唱片）から発売された「唐朝」と題されるファーストアルバムから「夢回唐朝」と「太陽」の二曲が選ばれている。ちなみに同じ号には、崔健らとバンド活動をしていた初期の中国ロッカー陳勁の代表曲「紅頭縄」の楽譜も掲載されている。

人気が急上昇を遂げつつあった中国ロックの一端がここに反映されていると考えていいだろう。

この号は更にもう一編重要な記事を載せている。達信が書いた連載記事「火紅的年代—60 年代英美流行歌壇史話」の第 4 回で、紹介されていたのは、「披頭士」すなわちビートルズである。もちろんビートルズの中国への紹介は実際にはもっと早い。たとえば先に触れた劉索拉は 1986 年に上海文学に発表した「藍天緑海」という小説の冒頭に、Let It Be の歌詞の一節をエピグラムとして用い、Beatles の名も提示されていた。しかしそれは紹介というよりもむしろある種の崇拝であり、オマージュであった。客観的な紹介としてはこの『通俗歌曲』を待たなければならない（香港の情報誌における紹介はもっと早いが、中国返還前の香港からの中国国内への影響は限定的で

あったと思われる。)。ちなみに、「通俗歌曲」におけるビートルズの楽譜紹介は、1995 年 2 月号であり、その曲目は「Yesterday」であった。

さて、1993 年になると、6 月号に張楚の「姐姐」と ADO の「我不能随便説」の楽譜が掲載された。これは魔岩文化レーベルから出た中国ロックのアンソロジー「中国火」の一曲目と二曲目に他ならず、ここから推測できることは、魔岩文化レーベルがレコードのプロモーションのために、この二曲の掲載をもちかけたのではないか、ということである。中国の音楽業界の形成には、台湾の業界も大きく関わっているのであるが、それがこのような形で表れているのだろう。

それ以後は、1994 年 10 月号に、鄭鈞の「回到拉薩」「赤裸裸」「極楽世界」が、1995 年 2 月号に、丁薇の「断翅的蝴蝶」、そしてビートルズの「Yesterday」の楽譜が掲載された。1995 年 9 月号には、ロックの楽譜の掲載はないが、「歌迷天地」のコラムで、折りしも交通事故死した唐朝のベーシスト張炬をとりあげており、また前年「断翅的蝴蝶」でデビューした丁微を紹介する記事が載っている。しかし、ジャズ色の強いボーカルを聞かせ、大いに期待されたが結局このアルバムは不発に終わった。丁薇がブレイクするのは、それから 3 年を経て発表された「開始」というセカンドアルバムであった。

更に 1996 年 2 月号には、「揺滚一族、揺滚 Party、再熱京城」という北京のロック事情を紹介する記事が載り、臧天朔の大ヒット曲「朋友」の楽譜が掲載された。1996 年 3 月号には、竇唯のソロアルバムから「艶陽天」の楽譜が、4 月号には、ロッククイーン羅琦の片目を失明した事件とその後を扱った「羅琦・失眼的滋味」と元黒豹のキーボード奏者でヴォーカリストでもあった峦樹が、所謂セカンドアルバム『黒豹Ⅱ』を録音した直後にバンドを脱退したことにより、日本版『黒豹Ⅱ』には、『黒豹Ⅲ』のメンバー、つまりヴォーカルに秦勇が、キーボードに馮小波がクレジットされ、実際の録音にかかわった峦樹のクレジットがないことを理由に JVC を提訴した記事「黒豹前主唱峦樹状告 JVC」が掲載されている。

北京首都図書館で確認できた 90 年代の『通俗歌曲』のロック記事、楽譜の情況は大体以上のようなもので、記事にしろ、楽譜紹介にしろ、それほど多いとはいえない。雑誌そのもののメインはやはり、歌謡曲であった。しかし黒豹、唐朝など中国ロックにおける重要なアルバムの発売や有名な事件については、比較的妥当な取り上げ方をしていたことがわかる。ただ外国のロック音楽については、まだ詳細な紹介を行なうには至っていない。

90 年代末から『通俗歌曲』がロックの専門誌に姿を変えた理由を分析するには、90 年代以前と以後でどのような読者層の変化があったのかなど、他に考察しなければならない問題も多く存在しているが、それは今後の調査に譲るとして、ともかく 90 年代の『通俗歌曲』によるロック紹介の活動は、同時代における中国のロック音楽業界の動きと連動していたのであり、その受容に対応していくためには、「ロック」の専門誌に生まれ変わる必要があったのであろう、ということがおおむね理解できた。

Ⅲ. ロック専門誌としての『通俗歌曲』——1990 年代末から 2000 年代

1999 年に雑誌の表紙を飾ったのは多く中国のミュージシャン（陳底里など）であったが、海外のバンドを紹介する記事も掲載されていた(たとえば YES や DEF LEPPARD など)。しかし 2000 年になると、俄かに西洋人ミュージシャンを表紙に起用する号が目立つようになる。7 月号表紙の

MADONNA が著名どころだが、記事に関しては、5 月号に MOBY、BJORK、LIMP BIZKIT、6 月号に KURT COBAN、SMASHING PUMPKINS、EVERYTHING BUT THE GIRL、7 月号に METALLICA、KID ROCK、KORN、9 月号に DIAMANDA GALÁS、11 月号に SKID ROW、PANTERA の PHIL ANSELMO、LIMP BIZKIT の FRED DURST、12 月号に EMINEM の記事がある。2000 年になって、西洋のミュージシャンやバンドの記事が急増している様子が見て取れる。この段階になると、1980 年代半ばまでで西洋のロックやポップスを聴かなくなった筆者には、全くチンプンカンプンと言っても過言ではない。

2000 年の反動であろうか、2001 年になると、表紙は中国のミュージシャンが多くなる。例えば、1 月号は崔健で、「解剖崔健」という特集記事が組まれている。また 5 月号が痛苦的信仰、6 月号が姜昕、12 月号が左小詛呪という具合である。それでも、1 月号には、RADIO HEAD、COLD PLAY の記事が見え、西洋から中国にシフトした、というわけでもない。2 月号の表紙は西洋人女性だが、唐朝、黒豹、許巍といった中国ロックの大御所バンド、大御所ミュージシャンの記事が掲載され、南寧のアンダーグラウンド音楽シーンについての記事も見える。西洋ロックとしては、LED ZEPPELIN の記事があり、西洋ロックでも大御所が紹介された号である、と言っていいだろう。5 月号の特集は「RAP & METAL」（ラップとメタル）、6 月号が「WOMAN ROCK」（女性ロック）、8 月号が「打口歳月」（海賊版の年月）、12 月号が「酒吧文化」（バー文化）という具合に、中国ロックの歴史を知る上でポイントをついた特集が組まれているように思う。

つまり、専門誌になって以来、ずっと西洋と中国の新しいロックのトレンドを追いかけてきたこの雑誌は、2001 年に入って、一旦たちどまり、中国ロックの 90 年代、および西洋ロックの 60 年代 70 年代そして 80 年代を振り返り、系統的に紹介し、認知し、評価していく作業を必要としたのではないだろうか。そこに漸く芽生えた専門誌としての自覚を読み取ることができるが、それと同時に人気の出てきた中国のミュージシャンや次々にデビューする新人ミュージシャンを紹介し、育てていく、そういった役割への自覚も読み取ることが出来る。

こうして 2002 年になると、表紙を飾るのは話題のミュージシャンが多くなっていく。3 月号の鄭鈞、4 月号の張楚、5 月号の朴樹、6 月号の丁薇、9 月号の朱哲琴とメジャーなミュージシャンが並ぶなか、8 月号の舌頭は、パンク系のロックとしては珍しく表紙となった。12 月号の表紙が JOHN LENNON であるのが、この年としては異色だが、もうひとつ異色のこととして注目されるのが、7 月号および 10 月号の表紙である。

7 月号の表紙に取り上げられたのは、2002 年度の「迷笛現代音楽節」の写真である。「迷笛現代音楽節」とは、中国のロック専門学校の草分け「迷笛現代音楽学校」が 1999 年より毎年開催しているロック音楽のフェスティバルである。このイベントは 2003 年までこの学校の校庭に舞台を設置して行なわれており、学校の卒業演奏会的位置づけであったと思われるが、次第に卒業生以外のミュージシャンをゲストとして呼んだり、海外のミュージシャンを呼んだりと規模が大きくなり、2004 年には、国際彫塑公園を会場に国慶節の 10 月 1 日から 4 日まで四日間にわたって開催される大イベントに成長して行く。

また 10 月号の表紙にとりあげられたのは、「麗江雪山音楽節」の写真で、これはこの年が第 1 回目の開催であるが、崔健、唐朝、朱哲琴をはじめ、中国ロック界のパイオニア的ミュージシャンが多く参加したことで話題になった。

こういう記事を目にすると、筆者は自らの高校生時代に毎月講読していた「GUTS」という雑誌に、映画になって日本でも上映されたアメリカの伝説的ロックフェスティバル「ウッドストック」の特集記事が何号にもわたって掲載されていたことを思い出す。当時、日本のミュージシャンは、クロスビー・スティルス＆ナッシュやリッチー・ヘブンスが演奏に使っていたギターのオープンDチューニング奏法を必死で研究していた。

おそらく中国の若者たちにとっては、これらのフェスティバルは、「ウッドストック」の中国版だったのだろう。周囲を公安に囲まれての音楽祭であるから、中国の若者はウッドストックでのようにハメをはずしたりはしなかったのだが。しかし、このようにして人が多く集まりエネルギーの発散されるイベントが、中国、それも天安門事件を２度経験した中国で、禁止されることもなく、毎年のように開催され、またその記事がウェブページや雑誌に掲載され、報道されるということは、ある意味驚異的なことだと思われる。

ちなみに『通俗歌曲』がロックフェスティバルを取り上げるようになったのも偶然ではない。この頃から、行政や企業はフェスティバルの経済効果に気づき始めたのである。2002 年の「麗江雪山音楽節」は、まさにそのことを表す象徴的なイベントであった。主催単位が麗江の旅行会社であり、それにネット会社や音楽関連企業、テレビメディアなどが協賛の形で開催を支援したのである。もちろん聴衆の多くは、中国全土からやってきたロックファンの若者たちだった。

また上海市政府は、観光都市上海の宣伝のために、「上海旅遊節」というイベントを行なっているが、2003 年の同イベントでは、南京路歩行街の一角を臨時の塀で仕切って、会場を設営し、深夜におよぶロックコンサートを行ない、100 元の入場券は瞬く間に売り切れた（当時のロックバンドのチャージは、20 元から 50 元（日本円で 260 円から 650 円）程度だったので、メジャーなバンドが多く出演していたわけではないとしても、安いチケット設定だったと思われる。崔健の単独ライブですら、この頃から 100 元を超えるチャージをとっていたことからもそれは確認できる）。その日コンサートに登場したミュージシャンは地元上海のバンドが中心だったのだが、コンサートの最後のトリに招かれたのは、中国のロックキング崔健だった。

ファンキー末吉『大陸ロック漂流記』にあるように、ロックを警戒し、いろいろな場面で妨害をしかけていた中国の政府機関が、ここでは街の経済活動を盛り上げるために、ロックを利用するまでになったのである。

Ⅳ.『通俗歌曲』の価格と流通形態

北京首都図書館で閲覧した 90 年代の『通俗歌曲』がどれくらいの価格だったのかは、迂闊なことに、確認できていない。しかし後の号に掲載されていたバックナンバーの広告によれば、95 年は合訂本が上・下冊おのおの 16 元、96 年の合訂本は上・下冊おのおの 22 元、97 年の合訂本上・下が各 31 元、98 年の合訂本が上・下各 25 元とされ、実売はそのほぼ半額であることが書かれている。1999 年、2000 年は毎号 6.60 元、2001 年は毎号 7.80 元に値上がりし、2002 年 9 月には、一気に毎号 13.80 元に急騰する。

急騰の理由は、ロックの認知と人気の上昇があったばかりではない。実はこの頃から雑誌に CD が付録として付けられるようになったのだ。誌面に紹介されるミュージシャンやバンドが写真や記事だけでなく、サウンドとしても聞けるようになった。これが定番化していくのだが、そうな

ってくると、付録 CD に取り上げられることが、新人歌手、新人バンドにとっては、有名になるきっかけともなっていくし、海外のバンドやミュージシャンも知名度を高め、ＣＤの売り上げや中国でのライブコンサートの客の入りにも影響してくることになる。

こうして、付録 CD は現在まで続く定番アイテムとなった。

ところで、この『通俗歌曲』を入手するには、どうすればいいのだろうか。例えば北京に住んでいる人であれば、街に出て行けば、大抵のところに「書報亭」と呼ばれる刊行物を販売する簡易店舗がある。民間の商業紙誌、娯楽系詩誌は大抵ここに売られている。発売日以降にここへ行けば店頭に出ている。店舗によっては、売れ残ったバックナンバーを安売りしているところもある。一冊でも入手すれば、出版元の連絡先がわかるので、定期購読を申し込むこともできる。バックナンバーの収集がいまだ不十分であり、発行部数や読者の地域分布など、まだ調査が充分できていない点も多いが、おいおい調査を進めて行きたい。更に、『我愛搖滚樂』『摩登天空』その他の刊行物の考察を今後の課題とする。

2010.10.10 初稿
2011.3.4 改稿

【文献・資料】

青野繁治（2006）「中国ロック音楽と行政」『現代中国』80 号
青野繁治（2008）「中国大陸揺滚楽界 20 年的概観」東華大学シンポジウムサマリー集
雪季（1993）『揺滚夢尋——中国揺滚楽実録』中国電影出版社
橋爪大三郎（1994）『崔健——激動中国のスーパースター』岩波ブックレット No.359
ファンキー末吉（1998）『大陸ロック漂流記』アミューズブックス
汪経芳（1999）『20 世紀最后的浪漫——北京自由藝術家生活実録』 北方文藝出版社
于今（1999）『狂歓季節——流行音楽世紀ぐ颶風』 广东人民出版社
顔峻（2001）『内心的噪音』 外文出版社
顔峻（2002）『地下——新音楽潜行記』 文化藝術出版社
陸凌涛 李洋（2003）『吶喊——為了中国曾経的搖滚』 廣西師範大学出版社
顔峻（2003）『燃焼的噪音』 江蘇人民出版社
朱大可・張閎（2005）高屋亜紀・千田大介監訳 『Chinese Culture Review 中国文化総覧』Vo.1～2 好文出版
香取義人（1999） 中国揺滚データベース http://www.yaogun.com/

大阪大学中国文化论坛 讨论文件 No.2011-10
Discussion Papers in Contemporary China Studies, Osaka University Forum on China No.2011-10

正在进化的摇滚专刊《通俗歌曲》：给中国介绍摇滚乐的刊物

青野繁治

"Tongsu Gequ" The Evolutive Rock Magazine that Introduced Rock Music into China

AONO Shigeharu

摘　要

中国已有几部有关流行音乐的刊物，其中包括专门介绍摇滚乐的《通俗歌曲》、《我爱摇滚乐》、《摩登天空》等。

本文要根据关于《通俗歌曲》的初步调查，了解中国刊物介绍欧美摇滚乐的情况，并将该刊物在 20 世纪末到 21 世纪初所作出的贡献弄清楚。

第一章，主要描述《通俗歌曲》的历史，指出《通俗歌曲》在 1990 年代末所发生的变化，并考察其封面标题所显示出的问题。《通俗歌曲》在 90 年代是主要刊登流行歌曲乐谱的刊物，但它在 90 年代末发生了巨大的变化，以后不太刊登乐谱，而主要刊登欧美摇滚信息的刊物了。其变化主要表现在封面的标题及其副标题上。90 年代末，标题《通俗歌曲》后面加了一条"中国摇滚第一刊"的副标题。有时候，还加了另外一个大标题《摇滚》几乎要压倒《通俗歌曲》，却有时候又恢复大标题《通俗歌曲》等等。这里能看得出《通俗歌曲》编辑部在读者群众的要求和政治上的制约之间有所分歧和动摇的情况。

第二章，主要描述《通俗歌曲》在 1990 年代的情况，指出该刊物当时主要是刊登流行歌曲乐谱的刊物。乐谱主要是中国国内所流行的歌曲，但有时候还刊登中国早期摇滚乐的乐谱和文章。那时介绍欧美摇滚乐的文章有是有，但还不多。该刊物最早介绍欧美摇滚乐的是披头士，刊登的乐谱是《昨天》。

第三章，主要描述《通俗歌曲》变成"中国摇滚第一刊"之后的情况。这里主要根据该刊物在封面所采用的乐队和标题下所提示的专题，讨论 2000 年代介绍中国和欧美摇滚乐的情况。这里主要描述了《通俗歌曲》反映着 2000 年代摇滚乐有广大的听众，能召开音乐节，但有一部分摇滚乐被中国政府认可并为政治服务等情况。

第四章，主要描述《通俗歌曲》的价格和流通形式，作为结语。

（担当委員：田中 仁）
http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm